

表2 KABC-IIの米国版と日本版の比較

	米国版 (2004年標準化)	日本版 (2011年標準化)
① 依拠する理論	ルリア理論・CHC理論	同左
② 適用年齢	3:0~18:11	2:6~18:11
③ 認知(処理)尺度	継次処理, 同時処理, 学習能力, 計画能力の4尺度	同左
④ 習得(度)尺度	なし	語い, 読み, 書き, 算数の4尺度
⑤ 非言語性尺度	概念思考, 顔さがし, 物語の完成, 模様構成, パターン推理, 手の動作の6つから構成	概念思考を除く5つから構成
⑥ CHC尺度	短期記憶, 視覚処理, 長期記憶と検索, 流動性推理, 結晶性能力の5つの広域的な能力	短期記憶, 視覚処理, 長期記憶と検索, 流動性推理, 語い, 読み書き, 算数の7つの広域的な能力
⑦ 下位検査	年齢に対応した基本検査に加えて補助検査が設けられ, 18の下位検査からなる	全年齢すべて基本検査のみで20の下位検査からなる。内訳は認知尺度が11, 習得尺度が9である。

IIとは異なる方向にあえて舵をきり, 日本版 KABC-IIに習得尺度を加えて標準化した背景はこうした事情によっている。⑥のCHC尺度については, 10の広域的な能力からなるCHCモデルへの適合性という点からみると, 日本版は7つの広域的な能力を測定しており, 米国版に比べ適合度が高いといえる。なお, 完全なCHC理論には10の広域的な能力と約70の限定的な能力が含まれる。日本版 KABC-IIでは, 聴覚処理(Ga), 処理速度(Gs), 判断/反応時間または速さ(Gt)の広域的な能力とそれぞれの限定的な能力は, 測っていない。なお, WISC-IVでは, 処理速度(Gs)が測定可能であり, 日本版 KABC-IIにはない特色がみられる。

III 日本版 K-ABC と日本版 KABC-II の比較

日本版 K-ABC と日本版 KABC-II の比較を, 表3に示す。

⑦についてみると, K-ABCはルリア理論のみに依拠していたが, KABC-IIは2つの最新の理論モデルに基づいている。KABC-IIを使えば, 一組の下位検査群を2つの異なった, しかも相補う観点から解釈することができる。KABC-IIでは, この「2重の理論的基盤」によって, 獲得された知識がその子どもの能力の指標として適切でない場合は, 検査者がこれを除いてアセスメントするという選択も可能になる。これは, たとえば日本語が二次言語である場合や, 軽度または重度のことばの障害がある場合, また自閉症児などの場合に

重要である。②に関しては, K-ABCは12歳が上限であったが, KABC-IIでは適用年齢の上限が18歳まで延長されている。

④の習得(度)尺度に関しては, 日本版 KABC-IIでは, 4つの下位検査(計算, ことばの書き, 文の構成, 理解語い)の新設により, K-ABCより詳しい測定が可能になるとともに, K-ABCでは測定できなかった書き能力を測定できるようになっている。このように, 習得尺度の充実と拡大が日本版 KABC-IIの大きな特徴である。⑥の下位検査についても, 6つの下位検査が新設され, K-ABC14の下位検査(認知処理9, 習得度5)から20下位検査(認知処理11, 習得度9)に増加されている。

IV 臨床的適用

日本版 KABC-IIは, 米国版 KABC-IIと同様にルリア理論とCHC理論の2つを採用していることから, 結果の解釈もそれぞれの視点から解釈することが可能である。また, 米国版 KABC-IIでは削除された習得尺度では, 読み, 書き, 計算, 数的推論等について, 日本独自の問題を作成している。このことにより, K-ABC同様に, 認知尺度と習得尺度を比較することが可能となっている。また, 習得尺度が充実したことにより, 学習につまずきを示す子どもたちを理解する上で, より多面的な深い解釈を可能としている。実施に際しては, これらの2つの尺度を独立したものとして, 認知

表3 日本版 K-ABC と日本版 KABC-II の比較

	K-ABC (1993年標準化)	KABC-II (2011年標準化)
① 依拠する理論	ルリア理論	ルリア理論, CHC 理論
② 適用年齢	2:6~12:11	2:6~18:11
③ 認知(処理)尺度	継次処理, 同時処理	継次処理, 同時処理, 学習能力, 計画能力
④ 習得(度)尺度	5つの下位検査により語い, 読み, 算数能力	9つの下位検査から, K-ABC で測る能力より詳しく, さらに K-ABC にはない書き能力を測定する。
⑤ 非言語性尺度	顔さがし, 手の動作, 模様構成, 視覚類推, 位置さがしから構成	顔さがし, 物語の完成, 模様の構成, パターン推理, 手の動作から構成
⑥ 下位検査	認知処理尺度9検査, 習得度尺度5検査の合計14の下位検査がある。	認知尺度11検査, 習得度尺度9検査の合計20の下位検査がある。
⑦ CHC 尺度	なし	CHC モデルの10の広範的能力のうち7つ(短期記憶, 視覚処理, 長期記憶と検索, 流動性推理, 語彙, 読み書き, 算数)を測定する。

尺度を先に実施してもよいし, 習得尺度から実施してもよい。

〈文 献〉

- 藤田和弘 (2006) : KABC-II の概要と理論的背景. K-ABC アセスメント研究, 8, 87-103.
- 藤田和弘・石隈利紀・服部 環 (2011) : KABC-II が依拠する二つの理論—ルリアモデルと CHC モデル—. 指導と評価, 57 (2), 38-41.
- 藤田和弘・石隈利紀・青山真二・服部 環・熊谷恵子・小野純平 (2011) 日本版 KABC-II の理論的背景と尺度の構成. K-ABC アセスメント研究, 13, 89-99.
- Kaufman, A.S. & Kaufman, N.L. (2004) : *Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition MANUAL*. AGS Publishing.
- 前川久男・中山 健・岡崎慎治 (2007) : 日本版 DN-CAS 理論と解釈のためのハンドブック. 日本文化科学社.
- 日本版 WISC-IV 刊行委員会訳編 (2010) : 日本版 WISC-IV 理論・解釈マニュアル. 日本文化科学社.
- 青山真二・熊谷恵子・小野純平 (2011) : 日本版 KABC-II における下位検査の構成. 指導と評価, 57 (3), 47-49.

指定討論

——DN-CAS, WISC-IV, KABC-II の特徴と使い分け——

大六 一志

キーワード : DN-CAS, WISC-IV, KABC-II
Key words: DN-CAS, WISC-IV, KABC-II

I 各検査の特徴

1. WISC-IV

WISC は, 知能理論の揺籃期に, 個人の総合的能力の測定にふさわしいと考えられる言語性, 非言語性の課題 (下位検査) を集めて作られた。その後, 知能理論の発展に伴い, 理論的に必要な下位検査が組み込まれた。長い歴史をもつことから, 普及度, エビデンスの蓄積ともに, 他検査に優る。また, 他検査に比べ, 生活経験から得た知識 (結晶性能力) がより多く必要とされる検査である。

DN-CAS や KABC のような指導書は WISC には見られないため, 結果を指導に結びつけにくいと言われることがある。しかし実際には, 専門知識

Hitoshi Dairoku: Discussant: Features and the Proper Use of DN-CAS, WISC-IV, KABC-II
筑波大学人間系

をもって検査結果を読み取り、指導計画を立てるという点は、どの検査でも同様であり、WISCの結果が他検査より指導に結びつけにくいということはない。

2. DN-CAS, KABC-II

DN-CAS, KABCは1980年代以降に、理論主導で下位検査を選択し構成された。両者は知能理論ではなくルリアの認知理論を基礎としており、また、認知心理学の研究で実績のある課題を多く採用していることから、知能検査ではなく認知検査と呼ばれることが多い。特にKABC-IIの認知尺度の下位検査、およびDN-CASは、WISCとは対照的に背景知識を排除し、なるべく純粋に認知機能を測定するように作られている。また、理論主導で開発されたことから、理論的に導出された指導法があることも特徴である（藤田・青山・熊谷, 1998; Naglieri & Pickering, 2003 など）。

DN-CAS独自の特徴として、選択的注意機能やプランニング（要領よい処理）を測定している点があげられる。認知発達を支えるものとして、近年情動や動機づけの役割が強調されるようになってきているが、プランニング尺度は情動や動機づけとの関係が特に強く、これらの発達をみるツールとしても有効と考えられる（Perez-Alvarez & Timoneda-Gallart, 2008, pp.52-53）。

一方、KABC-II独自の特徴としては、習得知識の測定（習得尺度）や、学習能力、計画能力（段取り）を測定している点があげられる。ルリア, CHCという2つのモデルから解釈を選択するという試みも、他検査には見られないユニークなものである。

3.3 検査の共通点

三者の歴史的経緯は異なるが、その結果には相互に高い相関が見られるため、いずれも一般知能因子gや、流動性推理能力、視空間能力、言語能力を共通に測定していると考えられる。

II 各検査の使い分け

5～16歳児であれば3検査とも実施可能であるが、現実には時間的な制約があり、すべてを実施することは難しい。三者の中で最優先はWISCである。WISCは、背景知識が要求されるという点で現実生活と結びついた知能の側面を測定しており、最も総合的に知的水準を知ることができる。

一方、背景知識によらない認知の基礎過程を調べるためには、DN-CASやKABC-IIの認知尺度を用いる。また、習得知識の測定が必要な場合には、KABC-IIの習得尺度が優先的に実施される可能性がある。

〈文献〉

藤田和弘・青山真二・熊谷恵子編（1998）：長所活用型指導で子どもが変わる—特殊学級・養護学校用—。図書文化社。

Naglieri, J.A. & Pickering, E.B. (2003) : *Helping Children Learn: Intervention Handouts for Use in School and at Home*. Paul H. Brookes Publishing Co.

Perez-Alvarez, F. & Timoneda-Gallart, C. (2008) : *A Better Look at Intelligent Behavior: Cognition and Emotion*. Nova Science.

厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（精神障害分野）

**発達障害者の生涯発達における認知特性面からの能力評価方法の開発と
活用ガイドライン作成に関わる研究
平成 23 年度 総括・分担研究報告書**

研究代表者 上野 一彦

平成 24（2012）年 3 月 31 日

独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

Tel (03)5478-1377 Fax (03)5478-1379

